

研究者育成のための 質保証における グローバルスタンダード

数年前、「もはや日本は“経済は一流”とはいえない」という経済財政担当大臣の発言が注目を集めたことがある。そしてその後、政権交代後の事業仕分けで、「2位じゃだめなんですか?」という行政刷新担当大臣の言葉がまた話題になった。いまや“一流”や“一番”をめざしているのは、日本以外のアジア諸国で、経済発展の起爆剤として教育や医療に重点政策を展開し、世界の最先端をめざしている。

アジアにおいて日本は、戦後数十年間、医療や教育面でもロールモデルであった。しかし、最近はどうであろうか? The Joanna Briggs Institute(JBI)のセンター長会議やEAFONSなどの学会でアジア諸国の研究者と話をしていると、日本の医学・看護学の教育・研究は、台湾・韓国・シンガポールなどの国に追いつき、追い越されつつある気がする。

JBIの台湾の連携センターであるVeterans General Hospitalのセンター長Dr. Pei-Fan Muの話によると、台湾では政府の支援で、毎年JBIから講師を招聘し、臨床家・教員を対象にシステムティックレビューのセミナーを開催している。病院の看護師の2割は修士をもっており、根拠に基づく看護(EBN)の実践を推進しているという。現在、日本が全般的に教育・医療面で遅れているというわけではないが、教育・医療に対する戦略的な資源の投入は、他のアジア諸国に遅れをとりつつあることを感じる。

そうした背景を踏まえて本特集では、

- 1) 日米の研究環境の相違や、経済発展を遂げているアジア諸国の教育・研究の躍進の背景
- 2) 日本の大学の質の保証の一例として大阪大学ならびに大阪大

学大学院医学系研究科保健学専攻の試み

そして海外の研究者育成の質保証の例として、

3) 米国, 英国, 北欧, タイの博士後期課程の研究者育成の方略

4) 大阪大学に開設した The Japan Centre for Evidence Based Practice : An Affiliate Centre of the Joanna Briggs Institute に関連した研究者育成の方略について紹介する。

3) で紹介する国を選んだ理由としては、まず米国は長く世界の看護教育・研究を牽引してきた歴史がある。英国は EBM の推進・牽引力となったコクランコラボレーションを設立した国であり、コクランプロジェクトは近年の看護学の教育・研究の発展、および英国の看護領域の国際誌の飛躍にも大きな影響を与えた。一方、フィンランドなど北欧諸国は看護研究のなかで存在感を示している国で、質の高い大学院教育を反映するものといえる。アジアでは、タイが看護教育のレベルアップに国全体で取り組んでいる。

本特集は、日本看護科学学会の国際活動推進委員会が、2011 年の第 30 回学術集会の交流集会で発表した「看護研究者育成の質の保証のグローバルスタンダードについて」をもとに企画したものである。日本も看護系大学が増えるなか、国際競争力のある研究者を育成できる教育・環境を提供できているのだろうか？ 日本語という厚い壁と豊かな国内市場に守られるなか、看護研究は、流行言葉でいえば“ガラパゴス化”のリスクがある。本特集で米国, 英国, 北欧, アジアの異なる研究者育成の例を参考にしながら、日本における課題と方向性を検討していただきたい。

企画：牧本清子(大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻教授)